

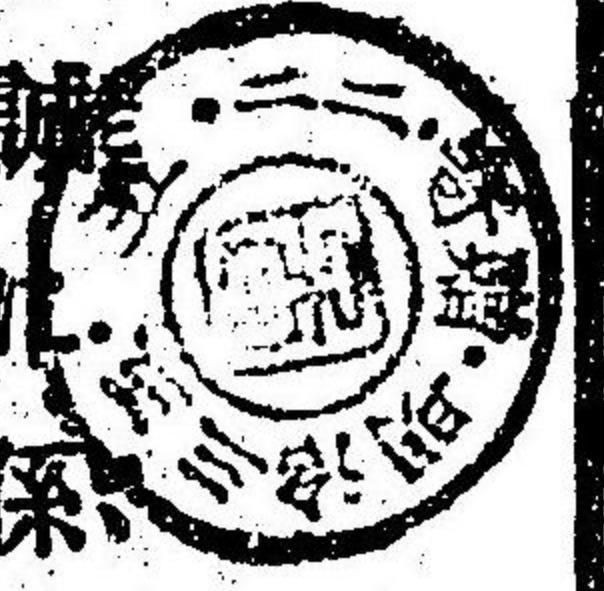
福井考公印

本文振仮名ハ誤字多シ看客恕セヨ

特38
315



福井考公印
奇蹟本



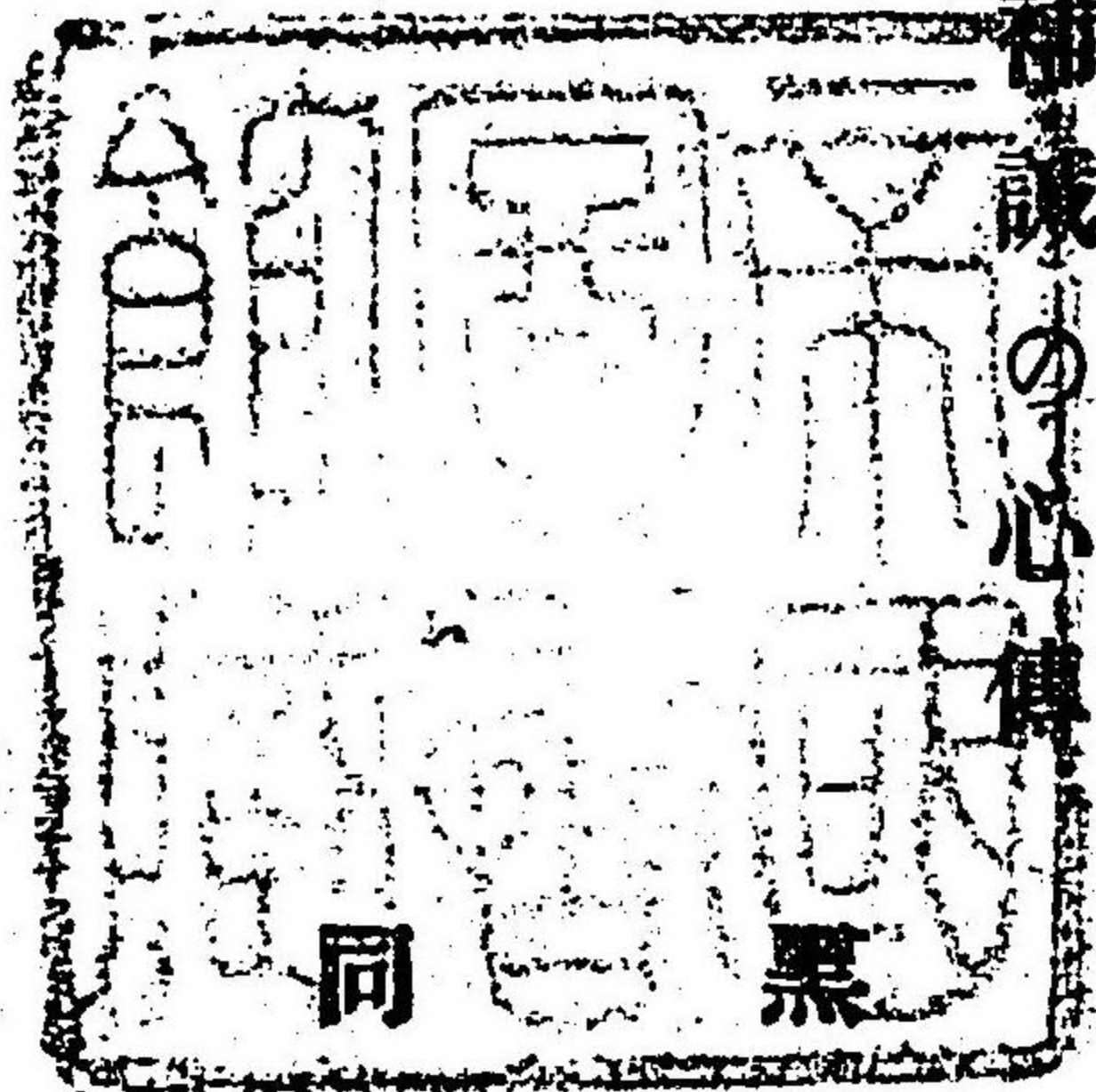
誠の心傳は祖
 宗忠神の詠
 せられし誠
 此の歌また
 門人示されし
 心傳の文を
 輯録す
 其の中に就て
 緊要なるもの
 を抜擢して
 一巻と
 本教初學の資
 料とせられし
 ものなり
 また此文は御
 書翰中の緊
 要なる條々
 のみを抜
 華め前後の詞
 を省かれて輯
 録せられたる
 もの
 なれど猶御眞
 筆の文言と較
 合を以て拜
 觀すれば緊
 要なる教意彼
 是脱漏あるを
 以て其儘に措
 かむも遺憾なり
 とて文中増補
 せられし條々
 一は(、)点を附
 したり拜讀あ
 らむ人は該所
 に

着眼せられむことを
 一また此文は全篇前中後三段に區別を立られ前
 段の首章は一文中に自から身と我と心との三
 段あり其次には三章毎にまた身と我と心との
 區別を立られ末章は首章と同じく前後三段の
 區別あり全篇を通観して一文章と看做し解釋
 すれば前後照應循環端なきがごとく條理明晰
 串穿一線路の如し
 一また此文第一段は本教を尊信する教徒を立
 る教の順序を立られ第二段は本立て道生する
 の道理を示され第三段は心の養ひより生くるの

眞訣を究むる節目心理の順序を立られ誠一つ
 に止る教旨を言外に發揚せられ養無の心法を
 論されしものなり

門人等識

増補誠の心傳



住教

管長 故 黒住宗篤編輯

同 本部長

大教正正五位 森下景端増補

同 傳習係長

贈大教正 星島良平校正

同 編纂係長

中教正 片岡正占訂正

誠の歌十五首

此^こは^は道^{みち}の^こ綱^{つな}領^{りやう}たる^る誠^{まこと}を^こ勤^{こま}むる^る其^{その}大^{たい}
意^いに^お係^{けい}る^る神^{かみ}詠^ぎを^し輯^{しゅう}録^{ろく}して^て教^{きょう}徒^たた^らむ
者^{もの}の^{しゆ}修^{しゆ}行^{ぎやう}の^{たん}端^{たん}緒^{しゆ}を^お啓^{けい}か^れ心^{こころ}理^り悟^ご入^{にゅう}の
氣^き象^{しやう}を^た提^{たい}起^きせ^られ^るもの^{なり}

誠^{まこと}を取^と外^がす^な

身^みも我^{われ}も心^{こころ}も捨^すて^て天^{あま}地^ちの^たつ^た一^{いつ}ツ^つの^{まこと}誠^{まこと}は^かり^に
鳥^{とり}か^あ鳴^なあ^つま^の果^はも^い今^{いま}こ^もお^なく^誠の^うち^と思^{おも}へ^は
誠^{まこと}ほ^と世^よに^あり^かた^き物^{もの}は^なく^誠一^{いつ}ツ^つて^て四^し海^{かい}兄^{あに}弟^{てい}
自^し然^{ぜん}に^ま任^ませ^よ

雲^{くも}き^りは^し自^じ然^{ぜん}の^{かぜ}風^{かぜ}の^は拂^はふ^也無^なき^身を^しれ^はか^くの^かく^ろ
天^{あま}地^ちを^わ我^{われ}身^みの^う上^{かみ}と^{おも}ひ^なは^あ雨^{あめ}ふ^らは^ふれ^風ふ^かは^ふけ

たもつとも又捨^{また}るとも思^{おも}ふま^く只^{ただ}樂^{たの}しみ^の心^{こころ}は^かり^に

我^{われ}を^はな^れよ

我^{われ}とい^ふ我^{われ}ほ^と惜^{おし}き^{もの}は^なく^惜む^我か^ら我^{われ}を^失ふ
我^{われ}とい^ふ其^{その}一^{いつ}物^{もの}を^す捨^すぬ^れは^あ廣^{ひろ}き^世界^{かい}は^わ我^{われ}身^みな^るら^ん
樂^{たの}しみ^もわ^か樂^{たの}しみ^と思^{おも}ふ^まく^只天^{あま}地^ちの^{たの}しみ^にして

陽^よ氣^きに^なれ

天^{あま}照^{てる}す^神の^{おん}御^み德^{とく}を^しる^時は^ねて^もさ^めて^も難^あ有^まかな
天^{あま}照^{てる}す^神の^{おん}御^み腹^{はら}に^す住^すむ^人は^ねて^もさ^めて^も面^{おも}白^{しろ}き^かな
向^{むか}ふ^事み^な御^{おん}蔭^{かげ}か^と思^{おも}ひ^なは^ねて^もさ^めて^も難^あ有^まき^かな

活物を捉はよ

姿なき心を生けて遣ひなは天か下にてみちわたるらん
我姿尋ぬるにまた及ふまいたる天地に照わたるもの
天照す神のみこころ人こころひとつになれば生通なり

教の文二十五章

全篇天然自然の道理を論述なく給ひ
て倫常の行爲を親炙門人に示し給ひ
し遺訓なり

第一章 聞様説様

此章は道の修行か主意にて身も我も
心も捨つる無心か眼目なり全篇を通
観すれば天心を以て主眼とす

一 毎度道の事御尋被遣先折合居申候古田氏宇三
郎など古連以前に立戻り其外人ましも不仕候
得共一心は立候哉と奉存候人は兎もあれ角も
あれ我執行大切に奉存候しかく講釋は甚宜敷
皆々悦申候先日も道歌に
こころに來て口斗りにてとく道を

耳斗りにて聞給へ人
といたし候心は己か心をはなれてとく時は口

斗り也其時何となく無心の所か口に出るなり
是則天のいはくむるなり又聞く人も耳はかり
にてきく給はく誠に一躰なり天地一躰なる時
は外に我といふものなく其時は天心なり少く
にて心あらは迷出と奉存候返すくも何事
も天地に打任せ望をはなれ執行仕度奉存候

第二章 信心

此章は信心か主意にて形の事を忘る

一 信心は御心に年のより被成ぬよふ万事日月に
打任せ何までも小供の心を御はなれ不被成日

月様を恐れなからおやさまとおもひ形の事を
御忘れ被成心はかりと思召御暮被成候はく
せんと御かけはあらはれ可申と奉存候

第三章 神道大意

此章は御神徳小主意にて神道の修行
か眼目なり

一天照大神の御神徳は言を以て難述御事にて候
へは難有と申候より外無御座候誠の一心に相
成生死を離れ神佛諸道の極意を究る事至て堅
くて至て安く只難有といふ一心に相成
天照大神と一心と一心に相成少くも亂れ不申

時は死と申事絶てなく是神明一躰にして天地
の間に入りたる事更になく外に道の執
行無御座候人は萬物の靈長たるもの故こゝろ
のもちおやうにて何になりともなられるもの
ゆゑ心を神にして神の行ひをすれば神也心を
佛にして佛の行ひをすれば佛なり鬼の心にな
り鬼の行ひをすれば鬼なり畜生の心になれば
畜生なり今何になるとも心のうち拵候もの
出來次第になるなり神道の執行はこゝろに神
を拵へ神の行ひをすころ神道本意なれ望次
第に成られる人ゆへ御油斷被成間敷候

第四章 神代

此章は心のみか主意にて神代か眼目
なり

此段の説教の聞よふより信心神道に
及ひ神代の形象を詳説し教旨のある
所をくらしめ以て第一段落とせられ
しものなり
一此間もふと一首餘り高尙に御座候得共自然と
出候まゝ

千早ふる神代も今も同一世を
皆末の世と思ふ憐と

とよみ其講釋仕候古昔の日月も今の日月もい
に一への心も無形今の心も無形わか分別をの
けてみれば古今の隔なくおほひにすまさは大
に通す其通すへき心のみにして形を忘るゝ時
は今も神代なるへい今小子講釋いたすとも神
世の講釋なり聞人の心も我を離れ給ふ時は直
に神代なり神世の次第に神徳厚く相成る事と
ろん彌難有奉存候

第五章 病

此章は無き身をうるが主意にてこと
ろさらさるが眼目なり

一未御腫物御直り不被遊よ御難義様と奉遠察
候歌と申事も存不申候へ共笑草

雲きりはいせんせ風の拂ふ也
無き身をいはかくの如きろ

乍憚御自身を御自身と不思議天地のものと思
ひ給はうたう難有のみに相成り可申候たう今
のきやう歌に身の無きと申候は兼ての目付に
て無きころかへつて有なれ天は則無にして則
有なり人の心も其通りなり無にして有り彌無
きものと被成候はう其御心いつまでもさらす
心さらすは御身もますく大丈夫なるへい且

此靈符宜敷祈念仕候彼形の爲に御頂戴不被成
御心の爲に御頂戴可被成候御心さへ自然と御
開き被成候はる形のうえは免にも角にもに御座
候

第六章 修行

此章は修行が主意にて神と成るか眼
目なり

一誠に人の身上を相考候へはたとへは玉子の如
し是を其まゝかのおにのゑじきに貴賤賢愚の
しやへつなく相成る也此道はかのおに、くは
れぬやう皮をやふり出てみれば天地へ遊ひに

出る也其玉子をぬくめるが執行也此ぬくめや
うの傳授と申は外にてはなしかの兼て祈奉る
日の御神也是を今日の勤は其身相應に持前を
勤めて心に先三十日と思ひ日神と我心とを
一ツにして少しも外なしいたし候時間違な
いに皮やふれ元の人と成る也と自然と申候所
皆々彌神と成るに間違ない

第七章 養無

此章は無を養ふか主意にて修行が眼
目なり

一道は兼々申上候通只一ツにきはまり候間少も

六ヶ敷事は無御座候元なき所より出たる
身なれば心の元はみな無き所より参候まゝ常
に其無所を養ふより外なく其なき所を養ふこ
ろ
天照大神の御玉をやくなふ所なれば此所勤り候
へは死るものなく此養ふ所より外に一大事は
なく幾重もく大事にいたし度は姿なき心な
り時に一首
姿なき心一ツを養ふは
かゝこき人の執行なるらん
いれた事斗御座候へ共常々此所を能御執行可

被成候

第八章 道盈虧

此章上下篇を合すれば道の満るが主
意にて大安樂御安泰が眼目なり
上篇此段は天心の満て欠ぬが主意に
て心一ツの樂が眼目なり

一道は満る也 天照大神の御分身のみちてかけ
ぬやう可被遊候人は陽氣ゆるむと陰氣つよる
なり陰氣かつ時は穢なりけかれは氣かれて
大陽の氣をからす也其所から種々色々の事出
來する也何事も有かたいくにて日をおくり

被成候へは不殘有かたいに相成可申也申上候
迄も無御座候へ共是さて有かたいの身の上
御座候へは少くも御油斷被成間敷候時に御一
笑

何事も有かたいにて世にすめは
向ふものこと有かたいなり

善惡ともた有かたいとおもへは時々毎事に有
かたい也元來此世に生れ來るを能々考候へは
皆かたちは難有か形の持まへ也か我執行
は難をなんとおもはぬか我ゆきやう也さす
れは苦に成事なく苦に成ぬ時はあとは樂くみ

斗也左様成心は道より外になく夫ゆへ道に心
住どきは大安樂也云すいて心一ツにて樂くみ
は勝手次第也

下篇 此段は道の満るが主意にて開運出
世が眼目なり道は日神の大道

一道はみちみつる也と申事に御座候まゝ一心み
つる時は邪の入る所なくすれは彌
天照大神の御分心御安泰にて誠に爰が例の開
運の所也時に一笑
何事も心のうち有物を
外を祈るる笑ふかるらん

此歌の心少御聞やうにて甚あふなく其譯は
心一ツと申さは外に神無きかと思はれ候則心
はこゝる也何かこゝるうと申さは日月の分心
こゝる也さすれば我心の元は皆一ツ也其一ツ
ころ
天照大神也彌御一躰の所を一ツに御執行可被
成候余の神でも皆元は一ツ也是則誠也○此所
也思へば、
難有事也

第九章

心の大極

此章は道は丸きが主意にて難有事を
忘れぬが眼目なり

一御立前御約束申上候通毎朝日拜に御目に懸り
申候積りに御座候御忘れ被下間敷候
道は○支より外は無御座候時に一首出ほうだ
ひ申上候

丸き中に丸き心をもつ人は

かきりいらぬ○支中なり

是則いきとほし何事も限りをつけ給ふへか
らすまるき御神に年はより不申少しの間もか
の丸き難有事御忘れ被成間敷候面白も嬉敷も
苦に成もかなし支も心一ツのきはめなり
天照大神への御信心は少しも、陰氣きらひ

なりたふ少いの間も御ゆたん被成間敷候是迄
が無念の文なりかういやくと思召御覽可被下
候むだ事は少いも不申上候あなか
尙々先文申上候通小子御文通申上候は道はど
申上候よりは講釋の心也無念にて相認候間い
つも何を申上候も相知不申是を活物と思召御
覽可被爲下候

第十章 誠

此章は誠の道か主意にて心の神か眼
目也

一 誠の道は六ツケ敷事は少いも無御座候兼々申

上候通直に天照大神也さすれはいきとほ
なり晝夜の分ちなくい支さへすれはみな
大神の道なりたふ少いの間もゆるみなく穢れ
ぬやういたし候へは何事も難有事斗時に一首
御笑

難有き事のみ思へ人はたふ
けふの尊とき今の心の

兼々申上候通我本心は
天照大神の分心なれは心の神を大專に仕候得
は是る誠の心なりおもへは心一ツにて自
由自在とたもへは此上もたのもいき御事也

第十一章 天命

此章は任すが主意にて曇ると明かな

一何事も御任可被遊候皆天命に御座候間難
有より外は無御座と奉存候幾重も分別は
少くも入用に無之物に相見候天道まか
せ程世に安心成る事は無御座候心安く暮候
ころ高天原と奉存候其原ころ神はまします
奉存候心曇る時は迷也迷ひの中には鬼も蛇も
居申候誠に恐敷は迷ひ也心明か成る時は則
天照大神我一心にあらはれ給ひて運をうへ給

ふ事疑ひ有へからす有かたくく時に一首
有かたやあら面白や

此手紙半よりかうやくの心にて相調へ申上
候其御心得にて御覽可被爲下候

第十二章 任天命

此章は分限を知るが主意にて天命に
まかするが眼目なり

一兼而申上候通道は何もむつかき事は無御座
候只身の分限を知り萬事ひかへめに被成候而
其上は何事も天命に御任せ被成候より外に致

方無御座候萬事一心より出る事に候へは免角
一心の亂れぬやうにいたし候處道と奉存候其
一心は天地の一心に御座候只今一首
露ことばに月はやとれと大空の
誠の月は一つ成るらん
月も日も我も皆一心より出候間別の物と思召
す善惡ともに難有のみに御動可被成候

第十三章 樂天命

此章は天命次第が主意にて天の教へ
を樂しむが眼目なり

一小子も次第に世話敷今日も社にて此書面も鳥

渡相調候間甚亂筆に御座候へ共少し申上候只
今神前において御拜中に一首

千早ふる神のうみ出す生の子よ

親の心をいたましむるな

誠に常に承知仕なから我物と思ひ天より生付
られし生物をいため廣大なる不生不滅の樂み
を失ひ候世の憐さ限りなくをいさき事也只何事
も天に任せ候事親に從ふ心なり小子執行は天
命次第行くも歸るも生るも死るも天命なれば
少しも苦に成る事無御座候只打任せ日用を暮
し候へは又自然と教も天より御座候是を以て

世を渡る時は只樂しみより外は無御座候

第十四章 病苦は天の試験

此章は少くも祈り不申が主意にて天命に安するが眼目なり

一誠に先達ては餘程相勝不申候其節御屋敷より御申上被成大に御心配奉懸忍入居申候其節段々御祈念被成被爲下重々難有小子は少くも祈り不申只何事も天に任せ此世に置て入用になき小子ならば御引取となるへく又世の爲に少くも相成ものならば快よく相成候と被存候所不思議に相直り候のみならず初よりまくな

ひとものに奇妙成事甚多く全御影と奉存候

第十五章 自然

此章は道は自然と天より顯はるゝが主意にて心の望を加へす本を忘れぬ

二ツか眼目なり

一道の事毎度御尋被下難有大分面白き様子に御座候つらく相考候處道は自然と天より顯はれ候道を何となく私の心より廣め候に是に従ふ人も十人は十色にて心の望を加へ用お候まゝ初は心のまゝに相成候様に御座候へ共いつの間にか本を忘るゝまゝ色々と道の邪魔を

て道を穢候と相見候午併爰か道の誠は難
有物に奉存候小子近頃の執行は何事も兎角物
によらす樂所を相務申候か向ふ者を外に
ては無御座候たとへは鏡に影をうつすか如く
のけは少しも跡なきかごとくたふ夜は宮に入
一人心をすますといへとも少しも淋しき事な
くさらは市中に居申候共是を嫌ふと申事無御
座候かく申は我と大徳のやうに自慢らく御
座候へ共其くらい勤り候へ共我と我心に尋候
へは中く目を付候所へは十か一つも勤り不
申候

第十六章 天ノ時

此章は道が主意にて萬事天の時が眼
目也

此段は病の治る道の入口より修行養
無盈虧安泰心の大極誠の晴明身の分
限樂天安命自然天時と道の順次を叙
列して心傳一篇の要領を收束く道の
隆昌に赴くは自然天時の至極たる事
を示されて第二段落とせられしもの
なり

一道も餘程みちろふに御座候古弟子中も又目

の覺候様に御座候萬事天の時より外に頼みは
無御座候いつれども一物一身に奉存候皆人々
天は天人は人と存候所より罪を作り候と奉存
候かく申我も我をと思ひて元を忘れて恐入申
候誠に我を離れて難有事も難有といれは一切
萬物一といて難有からん物一ツも無御座候只
よき事をのみとれば皆よき事斗成るものを惡
事のみとるとは甚た残念の事に奉存候然し貴
君様に近來不殘よき事斗り御取被成候事目
出度事斗御座候猶何時迄も今の所にて年を御
よせ被成間敷候

第十七章 心ノ養法

此章は心一ツが主意にて養ひ樂む

一道も益榮難有奉存候毎度申上候通何事も心一
ツと奉存候其心を天に奉任た朝暮難有にて
日を送り候へは是に勝る樂みは無御座候兎
角何事も入くまぬやう御考可被成候時一首
天地ともにめぐりし心ころ
限りくられぬ命なるらめ
とかく御心をとこほらぬやう被成長いきを
可被成候

第十八章 心ノ置所

此章は 天照大神が主意にて心の置所が眼目なり
一天照大御神を主人御親とも思ひ候へは不束なる心は出不申候間くれぐれも心の置所大切の義に御座候

第十九章 心ノ治亂

此章は 陽氣を鎮むるが主意にてころを動かさるるが眼目なり
一暑さも近來のあつさにていつもの土用中よりも先月中頃嚴敷御座候此節は陽氣表へはつ

候故か色々成る不事所々出來仕氣の毒千萬なる事數々御座候併道連中程は別條も無御座難有御事に奉存候兼而申上候通人は陽氣を下へ鎮め候へは何事もあやまりは無御座候兎角上へのほせ候へは萬事あふなき者に御座候色々なるへんの出來仕候も皆心の亂れに而御座候恐敷は心の上へ付事にて腹も立一切難有事を取外し可申候例の小子心にうかみ候まゝ只一筆申上候

第二十章 氣分ノ養法

此章は 陰氣にならざるが主意にては

一 道の事も種々の氣に成るが眼目なり
 彌難有相増邪はいよゝ、邪に相成候たどへ何
 程道を守り候共心陰氣に相成候は、出世相成
 難申候何卒春の氣に相成候而御執行可被成候
 第二十一章 心ノ用法
 此章は人々の一心に寄るが主意にて
 一人々の一心に寄候而奇妙なる事は毎々に御座
 候誠まことに世の中の事は其人の心ほとつゝの事と
 奉存候誠まことに古人の言にも心程の世を経ると申

事の御座候を皆うつかりと口計りに流れて仕
 廻申候心神こころに成候へは則神也佛ほとけに成候へは佛ほとけ
 也邪よこしまに成り候へは直ただに邪也其所より外に道は
 なきと奉存候去る人小子道を聞誠まことに病やまひと申者
 はなきものど申所を悟り八年之間風も引不申
 と被申候本の子甚感心仕候何事も心に御座
 候

第二十二章 難有詳説

此章は天地國恩が主意にて難有を忘
 ぬが眼目なり
 一 天地御國恩を御忘れ被遊間敷候道と申も足る

事を知るより外は無御座と存候則忘れぬと申
事難有をゆるさぬ所斗と奉存候併難有いも常
に相成候得は夫程に無きものと見候間幾重
も御座候古歌に御油斷被成間敷候かく申我も忘れ勝に
御座候古歌に上見れば有かひもなき身なれ共
と御座候へは此歌どの場用ひても難有歌に
御座候勤めて難有と申所に日夜住ほと難有事
に御座候と存候難有

第二十三章

難有比喻

此章は面白さが主意にて心の開くと
閉るとの二ツが眼目なり

一道は誠に難有ものにて常に○支中に住日とを
難有嬉しく何事も面白思ひ暮候へは其面白さ
が

天照大神の御心なり少くも七ヶ條の御心
を御忘れ被成間敷候時に一首
あら嬉しかる樂いき世の中を

心一ツ開くれば何か浮世を苦の土といふ
けても樂しみ難有事斗也皆心一ツを開くとふ

さくとの二ツなり

第二十四章 樂ラク

此章は心が主意にて天地と共に樂く

むが眼目なり

一 樂いみも我樂いみと思ふま

たふ天地の樂いみにいて

心も日月より來り給ふ心也形も天地のいせん

と生み給ふ形なれば我と無理にすつるにも及

不申候何事も天地と共に樂くむ誠にく難有

事斗りに御座候

第二十五章 生通セイツウ

此章は生通くが主意にて活物を捉ゆる

るが眼目なり

此段は心の養營より其置所動靜氣分

の養ひ心の用法張弛開否天地の樂く

み生通くの極所に至るまで心氣の作

用に係る遺訓を叙列して教法の大意

を開示し心理の妙所を啓發し修行の

階梯を架設し淵原に溯る生くの舟楫

を以て第三段落となり本教道統の概

畧を示されしものなり

一道の事御尋越被成委細承知仕候誠に御信心厚

一道の事御尋越被成委細承知仕候誠に御信心厚

く御修行御丹誠と御厚志奉感佩候し
く生通し候事道
しと申事は心も肉体も共に生榮ひて参候
の本意に御座候心が活物に候故心活て参候は
の形は心に付随ふもの故活榮に参るに限りは
無御座ものに御座候第一天道は生くにて天地
の道には死ると申事は更に無之者に御座候間
此所御依得被成願くは形諸共御活通しに被成
度御事に御座候然れども我と申恐敷もの御座
候故我と申者を御捨不被成而は明る支天道御
合点行兼候者に御座候間我を離れ難有一心を
以て御執行被成度候道は生通しに相違無御座

候へ共如何様に論候而も得聞取らざる人尙
誠を不動人は親子兄弟に而もいたし方無御座
候もの候間此所能御合点可被成御事に御座
候御道御執心之程は感心仕候へ共理を以て御
穿鑿よりは我を離れて誠を勤る事を第一に御
執行被成度候我を離れて誠を勤るか即ち活物に
御座候此活物を以て天地の活物を呼出すさへ
被成候へは自由自在に御徳蒙ふられ候也我を
離れ候誠の本躰か直に
天照大神と御合点可被成候我を離れ候誠は
天照大神と少くも隔なき活物に御座候

限りなき天照る神と我心
隔てなければ生通く也
此歌の場を返すくも御信心被成度御事に御
座候

明治十一年六月廿二日

原本版權免許

同 年十二月

同出版

同三十五年三月

増補出版

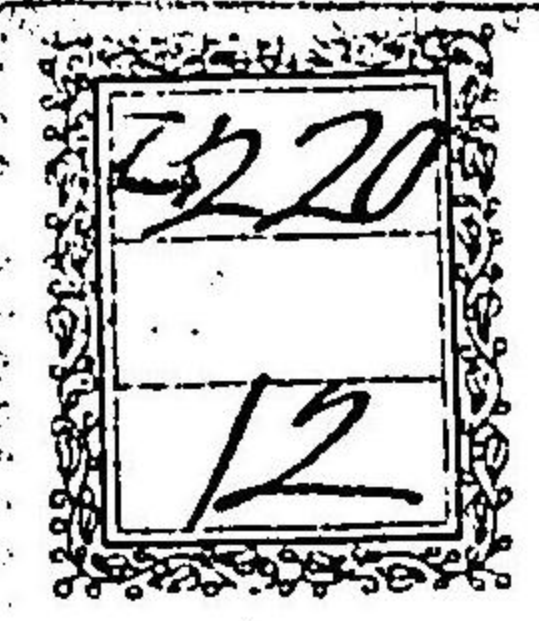
同 年同月廿二日

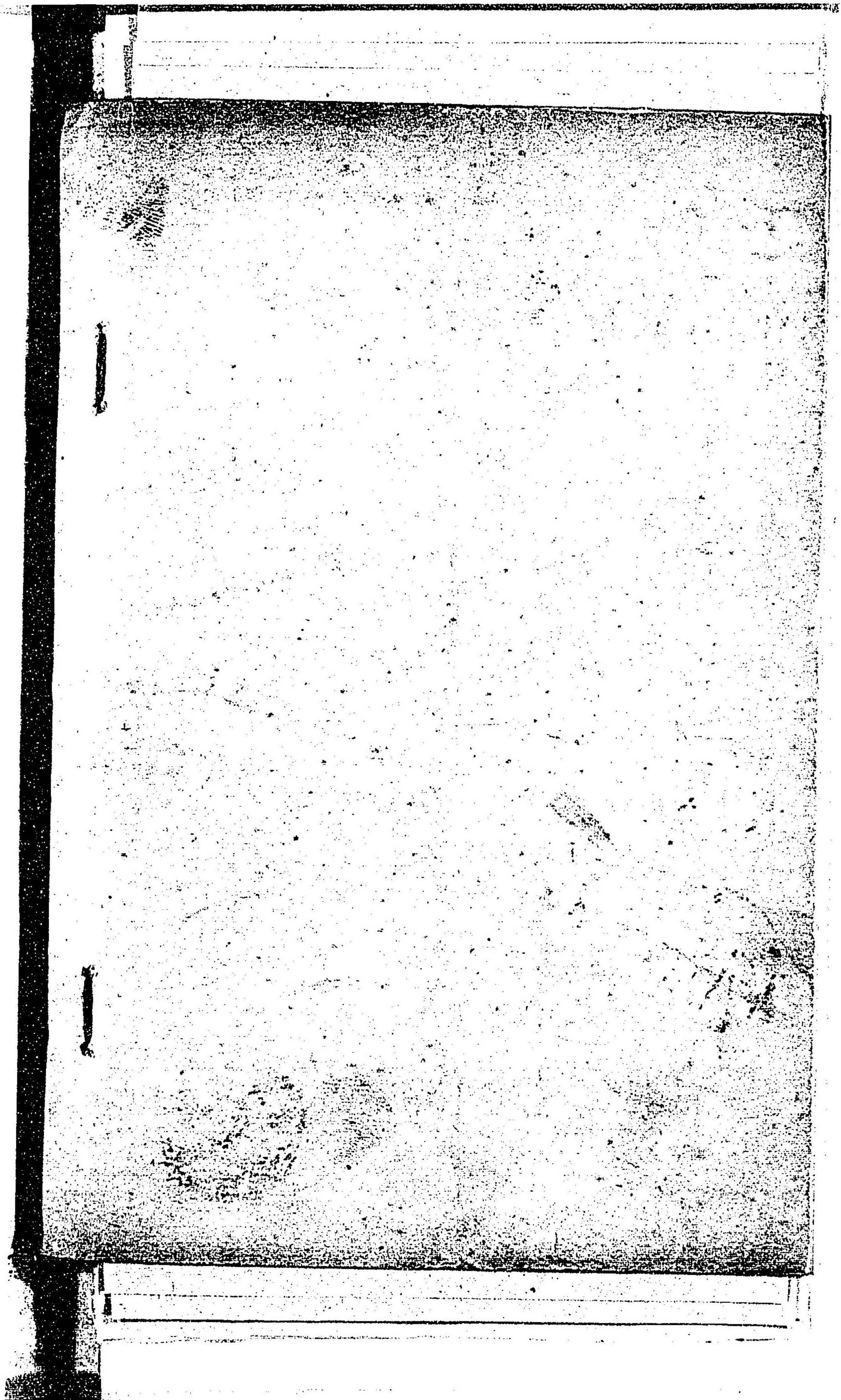
御届

編輯兼
出版人

黒住教管長 黒住宗

岡山縣平民備前國御津郡
大字上中野五十六番地





特 38

315

函	架	號
架	號	架
號	架	號

014624-000-7

特 38-315

誠乃心伝 (增補)

黒住 宗子 / 編

M35

ABB-1053

